

Title	三角表象の前史（一）
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 7 p.91-p.102
Issue Date	1992-09-16
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79568
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

三角表象の前史 (一)

井 本 英 一

A Study on the Triad Entities (1)

Eiichi IMOTO

サーデク・ヘダーヤトは、『呪術の園 (ニーランゲスターン)』(テヘラン、1342 A.H.S.、第3版)の中の一章で、イランの昔の祭りのいくつかを扱っている。その中で、マルド・ギーラーンとログエ・カジドムの2つの項目を設け、前者は『アンジョマン・アーラー辞典』、後者は『ジャハーン・ギーラー辞典』から引用している。

マルド・ギーラーンというのは、ゾロアスター教徒が、十二月の最後の五日間に行う祭りで、この五日間は、女たちは男たちより優位に立ち、彼女らは、自分の欲しいものは何でも、男たちから手に入れた。夫たちは妻たちに命令され、この五日の第一日目は、さそり(ガジドム)防御のため、さそり除けの護符(ログエ)を書く。

ログエ・カジドムについて、次のようにいっている。『被造物の不思議と存在物の珍奇』の著者(十二世紀イランのナジブ・ハマダーニー)はいう。ゾロアスター教徒は、エスファンダーラムズ月(十二月)の最後の五日で、マルド・ギーラーン祭という祭りの第一日目の夜明けから翌日の夜明けまで、害虫を防ぐ目的で三枚の護符(ログエ)を書き、それを部屋の三方の壁に貼り、上座の壁である四番目の壁は、そのままにしておく。伝説によると、イラン神話の英雄ファリードゥーンは、この日、護符をつくって、虫と動物の毒を閉じ込めたといわれている。ペルシア人は、この護符に、「神の名によって」と「ファリードゥーンの名によって」という文言を書く。英雄ファリードゥーンは、ペルシア人にとっては、セム族のノアであるので、アラビア人は、その護符に「両世界のノアに平安あれ」と書く(148頁)。

年末は、一年がもっとも死の状態におちいったときで、混沌の状態にある。古代のゾロアスター教徒の暦では、年末の五日は、三〇日×十二月から成る三六〇日に付加された閏日であった。この五日間に、新年の再生直前に行うバッカナリアやサツルナリアといった無礼講が行われた。男と女の位置が逆転したのもそのひとつの現象であった。この期間は、奴隷が主人になり、主人が奴隷になった。王の場合、臣下の者や奴隷が仮の王となり、元日に、仮の王は追放されたり殺されたりして、王がその位に復した。ノアは、世界の終末である大洪水のあと、アララット山頂に

漂着し、洪水が引いたあと、方舟から地上に降り、「生めよ、殖えよ、地に満てよ」という神のことばのとおり、人類の祖となった。ノアは、死と再生の両世界にまたがる人物であった。イランの英雄ファリドゥーンは、混沌の象徴である蛇を退治し、王位に即くので、ノアと同じように、死と再生の両世界にまたがる人である。蛇殺しとしてのファリドゥーンは、わがスサノオノミコトにあたる。スサノオノミコトも、高天原と中つ国と黄泉国を往還する神であるので、その特徴には似たものがある。

ここで問題にしたいのは、年末の死と混沌の状態にあるとき、虫除け、さそり除けの護符を四方の壁ではなく、三方の壁に貼った習俗である。本来、四つあるのが普通であるのに、ある状況のもとでは、それが三つになる。日本の古い習俗で、死の忌みをともなった三隅蚊帳というものがある。沖縄や対馬の一部には、死骸安置の部屋に幕を張り、また、三隅蚊帳を吊って遺族が中で侍した。古く、葬儀後に、墓地に接して喪屋をつくり、遺族が籠って別火生活をする風習があった。各地で墓に小さな屋形様の覆いをつくる習わしがあったが、これも喪屋の退化とされる。蚊帳は、その中に遺体を安置するだけでなく、出産のとき、窓にかけたり、雷が鳴ったとき、中に入る。これらは、目に見えぬ魔物をさけようとするためらしい（柳田國男監修『民俗学辞典』東京堂、1951年、「蚊帳」「死の忌」の項）。

遺体を安置するとき、蚊帳の中にそれを入れるが、蚊帳の網目は、いわゆる邪視除けの力をもっていて、魔除けになる。遺体や出産や雷の害を怖れる人を、蚊帳の網目が守ってくれると信じられたのである。今、問題にしようとするのは、蚊帳の四方を吊るのではなく、三方だけを吊り、一方は垂らしたままにする習俗である。三隅蚊帳は忌みをともなうので、垂らす方向は乾であったり、^{うしろ}良の鬼門であったりする。西北の乾は、神や祖霊が去来する方向であるので、遺体の保護と遺体から魂が去る道の確保という意味がある。鬼門の方向をあけるのも、これに準じて考えることができる。井之口章次『日本の葬式』（早川書房、1965年）にいう。経帷子は、死者の姪か孫娘が縫うが、それも数人が引きあうようにして縫うので、引っぱり縫いの名がある。しかも糸尻を結ばない。引っぱり縫いは、忌みの害を分散させるための手段であり、糸尻を結ばないのは、完全な形に縫い込めることを嫌ったためであろう。死者を通夜のとき三隅蚊帳の中に入れたり、喪家と贈答する米袋の口をくくらないで持ち歩いたりするのは、全てひとつながりの心持ちであって、今はまだ完全な説明ができないけれども、靈魂に関していることだけは、はっきりいえる（92-93頁）。

三隅蚊帳の理由の一つに、「満つるを嫌う」という心性があるとするのは、否定できない。完成してしまわないのは、多くの文化では、悪魔の邪視を避けるためだとされる。本来、四つあるべきものが三つしかないのは、日常的なものに対し、非日常的なものを考えさせる。このような思想は、日本文化ばかりでなく、他の文化にも見られるので、日本特有のものではない。

ヨーロッパでは、死刑を執行する刑吏は、教会の内部でも、他のキリスト教徒からはるかに離れた席に座らねばならなかった。居酒屋に入るとき、彼は戸口のところに立って、帽子を少しも

ち上げて、自分の職業を示し、中にいる客が抗議しなければ、彼は隅の特製の三本足の椅子に座り、把手のないジョッキで飲まねばならなかった（阿部謹也『刑吏の社会史』中公新書、1978年、20-21頁）。古い絞首架は、L字型を逆さに立てたものであった。さらにそれはT字型になり、もっとも普及したのは、2本の支柱と横木から成るものであった。その他、三角形の土台の三隅に3本の支柱を立て、3本の横木を渡したものがある。受刑者を絞首架の上に引き上げ、そこから下に落として宙吊りにする場合は、三本足の梯子を使って、受刑者と刑吏が登った（阿部、前掲書、48-50頁）。三本柱の絞首架は、最古のものではないらしいが、古い祭壇の名残と考えられる。梯子は二本足で地上に立つが、刑吏用のものは、もう1本縦の材が通っているので、横木の幅も2倍くらい長くなる。この幅広の梯子の半分の刑吏が上り、受刑者をあおむきのまま、もう半分を使って、引き上げるのである。

京都太秦にある木嶋坐天照御魂神社の鳥居は三本柱である。普通の鳥居は二本柱で、横に笠木と貫が渡してある。鳥居は門であり、古くは、柱間に石積みやはめ石があった。南島にはその名残が見られるが、現在では、笠木の上に磔を投げ上げて、そこに積み上げたり、鳥居の近くに小さい石積みをつくる。あるいは、柱の周囲に石を置いたり、石巻き鳥居という形式で、両方の柱の根本に石を巻く。絞首架の多くは、2本柱と1本の横木から成るが、それは元来は門であり、祭壇であったと考えられる。中世ヨーロッパの絞首架は、絵を見ると、なだらかな丘の上に立っており、その横の道を通る人々は、柱の根元に石を置いていった。刑死者は、神への供物と見なされたのであろう。人々は、石を置くことによって各自の祭壇をつくり、死者を神に供えたのであった。

木嶋神社の鳥居は泉の中に立った3本の石柱と、3本の笠木と3本の貫と3枚の額から成り、柱は八角形である。三本柱が立つ三角の空間は泉になっているが、その中心部は石積みになっているので、石の島が水上に浮かぶようである。この石積みは祭壇である。他の文化では、この種の三角門は、古くは絞首架でもあり、祭壇でもあった。人身御供は横木に吊されて神に供えられた。神社や仏閣の入口にあたる鳥居や山門の近くには、かならず手洗所が設けてある。古ければ古いほど、水は入口に近い所から湧出した。もっとも古い形式は、入口から水が湧いた。寺社の境内にある池は、手洗所とは別のものであるが、おそらく、祭壇と一体になった泉の表れであろう。余談になるが、太秦近辺の文物には、ユダヤ文化の影響が見られ、秦氏もユダヤ人の移民であったということが、明治時代の末期に、佐伯好郎によって主張された。同じころ、木村鷹太郎は、高天原をアルメニアに比定し、日本民族は、ギリシヤ、ローマ、エジプト、さらにはイスラエルの人々と同系であると論じた。

阿部謹也『中世の窓から』（朝日新聞社、1981年）にいう。中世ヨーロッパの靴職人の世界には呪術的な伝統があった。中世の絵によれば、靴職人はみな三本足の椅子に座っていた（80頁と85頁の絵）。靴屋がイエスの処刑に協力したために、死ぬことを許されず、世界をさまよい歩く「さまよう靴屋」の伝説が生まれた（84頁）。靴屋がイエスの処刑に協力したという、

キリスト教徒にとって忌まわしい伝説の裏には、靴屋に対して人々がもっていた当時の差別観があった。中世の刑吏が、居酒屋で三本足の椅子に座って酒を飲まねばならなかったことは前述した。靴職人は、ニュルンベルクの職匠歌人であるハンス・ザックスやドイツ最大の神秘主義者といわれたヤコブ・ベーメのような誇り高い人物を出した集団であった。彼ら自身は刑吏ではなかったが、それでも一般的に、世間からは差別されていた。三本足の椅子がそれを物語るのである。しかし、三本足の椅子は忌まれたが、ただ、死と関係するだけの忌みではなかった。

ギリシアのアクロポリス南東麓にあるディオニュソスの神殿には、三本足の台を屋根に載せた礼拝堂が残っていた（河野与一訳『プルターク英雄伝』「ニーキアース」三、岩波文庫）。この三本足の台は祭壇で、屋根の上で神に供物が捧げられたことを物語っている。松田治『ローマ神話の発生』（社会思想社、1980年）は、キケロの『ト占論』一・四六・一〇四の話を用いている。メテルスの娘カエキリアは、姪の結婚をうまくまとめたいと思ったので、幸先よい前兆をえるべく、小さな祠へ行った。そこに姪が立ち、カエキリアは椅子に座っていた。長い時間がたったが、カエキリアは一言も発することはなかった。姪はおばに、その椅子に座らせて欲しいと願い出た。おばは姪と代わったが、しばらくのち、カエキリアは死に、姪はおばの夫と結婚した（171頁）。祠にあった椅子は、神への供物としての人間が座るもので、三本足とは書いてないが、祭壇であったことは確かである。後述のデルフォイの三本足の椅子と同じものと考えられるからである。『ト占論』の話では、カエキリアの座る椅子は、死と再生を演出する。結果的には、姪とおじが結婚するために、おばがいけにえになったのである。この椅子は祭壇であった。

J.B.プリチャード『写真で見る古代近東』（第2版、プリンストン、1969年）の五八八番に、ラス・シャムラ出土の三足で、上部に円形の皿のついた青銅の香炉がある。八四〇番には、ヨルダンのエッ・サイーディーエ出土の三足の同じような構造の青銅の香炉がある。香炉は、極東のものも三足である。クレタ島後期ミノス文化に属する、クノッソス東方の北部海岸グルニア出土のものに、三足のしっくい塗った低い土器の机がある。机の周囲には、蛇が巻きついたテラコッタ製の女神像、同じような像の破片、二匹の蛇の頭、四匹の鳩、双斧の装飾のついた土器の大がめの破片、奉納用の聖角と三つの儀礼用花瓶が置いてあった（E.O.James『古代近東の神話と儀礼』ロンドン、1958年、138頁）。これらの香炉や三足台は、神聖な用途に使われたもので、ことに後者は祭壇であった。古代中国のかなえは、三足の間の地面で火を焚いて、容器の中のを煮たが、山中あるいは辺境の、あの世との境界と考えられる場所にそれが据えられた場合、参加者は、そこでいわば神人共食したのであった。

古代ギリシアでは、かなえは大地の穴の上に据えられ、その上に巫女が座って神託を伝えた。紀元前一世紀の歴史家、ディオドロス・シクルスが伝えるデルフォイの神託発見の経緯は次のようになっている。神殿の至聖所のある場所には、かつて大地の穴があった。一頭の山羊がその穴に近づくと、おかしい動きで跳びはね、奇妙な声をあげた。山羊の番人が近づいても、同じようなことが起こった。山羊は物の怪に憑かれたように振る舞ったが、人間は未来のことを予言した

のである。人々は、その穴の上に、青銅製三足容器によく似た三本の足をもったかなえを据え、選ばれた一人の女性がその上に座って神託を告げた（村川堅太郎、中山典夫『デルフォイの神殿』世界の聖域3、講談社、1981年、31頁）。このなかえは、古代西アジアで出土する青銅製なかえと似たものというから、椅子の類ではなさそうである。ここに座って神託を告げた巫女は、もとは人身御供として、穴の中に投げ入れられたのかも知れない。

アラビアのメッカにあるカアバ神殿の内部は、床面が地上七フィートの高さになっていて、そのまん中に穴があいている。神殿の天上は、床面から一二～三メートルの高さにあるが、へその緒と呼ばれる三本の木柱で支えられている。三本柱は、へその緒の動脈二本と静脈一本を表し、それが大地のへそである地上約二メートルの岩盤に立つ。それは、胎盤とへその緒、あるいは新生児のへそとへその緒を表象すると考えられる。しかし、一方、穴のある大地のへその上に立つ、三本足の机とも考えられるのである。この場合、上部の陸屋根は、机の天板や椅子の座を表象する。この構造は、京都太秦の三本鳥居のそれと、ある種の類似性をもつ。カアバ神殿の、地上に突出した大地のへそである床は、祭壇そのもので、それは、三本鳥居の下石積みに対応する。周辺の泉水は、カアバ神殿が、毎年の集中豪雨のあと、洪水の海に浮ぶさまを喚起させる。カアバ神殿は、いっぽう、旧約のノア方舟と同類であるので、周囲に水があるように設計されたのであろう。日本では、兵庫県高砂市の石宝殿は、石でできたカアバで、四角い池の中に直立している。太秦の三本鳥居には天板はない。柱は平行して立つ。カアバ神殿の床面の上に建つ石壁と屋根は、構造的には後になってできたものである。本来は、へそ石と穴と三本の柱であったとも考えられる。カアバ神殿には、そのほか、床面から天井（屋根）に梯子が立ててある。この構造からは、カアバ神殿の部屋が、地下家屋の名残であったと考えることもできる。あるいは、この聖所が、天と地と結ぶ梯子でつながれていたことを表すのかも知れない。そうならば、カアバ神殿は、地上の、水の上に浮くこともある建物ということになる。

三本の柱は、血管にたとえられる。祭壇のそばに三本の柱がある場合、二本は、二本柱の鳥居の柱に相当すると見られる。他の一本は、祭壇で祀られる神を表すのかも知れない。二本の柱は、鳥居の柱や、朝鮮村落の入口にあった、天下大將軍と地下女將軍の木像のように、男柱と女柱の別があったので、何らかの生き物であったことがわかる。古くは、祭壇の左右を守る雌雄の野獣であった。野獣もただの動物ではなく、祖先獣としてのトーテムであった。まん中の柱は、ポスニア・セーローンつまり、「野獣たちの女主人」であった。それが男性神となるか、女性神のまま留まるかは、それぞれの文化によった。前掲のヨルダン出土の青銅かなえの足の基部には猫の足がついている。仏や法主らが座る獅子座は、四足の椅子であるが、その足の先端部は獅子の足になっている。これは、野獣たちの主、百獣の主が仏と考えられたからである。

葬家は、そのしるしとして、門口に三本の棒の先端を結んで、足を三方に拡げた三角錐形のものを立てる。それ自体、三面のピラミッドであるが、これも一種の祭壇である。この三角形は、喪家の入口のまぐさに貼った、忌の字を書き、四つの角が上下左右にくるようにした紙や、死者

や近親者が額のところに付ける三角布（紙）と、みな同類である。

太陽の中に、三足のカラスがいるという伝承がある。長沙の馬王堆漢墓の木棺を覆っていた帛画の中に、日中の三本足の鳥がいた。出石誠彦『支那神話伝説の研究』（中央公論社、1943年）にいう。鳥がなぜ三足なのかについて、『春秋元命苞』の「陽数は一に於て起こり、三に於て成る。故に日中に三足の鳥あり」を引き、これに従うべきだとしている（78頁）。中国の天子の冠には、円形の水晶二枚の間に、三足の赤鳥の形をはさみ、円のまわりに金線を放って、陽光をかたどっている。赤鳥を円形の中に置いて、太陽を表現するのは、すでに周代に始まるという（森豊『聖なる日光』六興出版、1984年、209－210頁）。中国南方のタイ族の文化には、^{よく}黿という三本足の亀がいた。W.エバーハルト『古代中国の地方文化』（白鳥芳郎監訳、六興出版、1987年）にいう。中国南部のタイ族の三本足の亀は、戸外で性交する部族の精液が大地に落ちて生まれた。この亀は、人の影を射て殺すといわれ、いつも病氣と関連する（173頁）。亀は、水中と地上、地下と地上を往復する不吉な生き物であるので、忌まれたのであろう。亀は万年といわれるけれども、この文化では異常なものであった。

渡辺素舟『東洋文様史』（富山房、1971年）にいう。法隆寺の玉虫厨子の漆絵には三本足の鳳が見られる。鳳の頭は鶏頭であるので、三本足の鶏もあるように思われる。中国では、太陽の象徴に、三本足の赤鳥を描いている。この三本足は、父と母と子という有機的関係のものである。赤いのは、太陽の光を表象する。また、三本足は、天子のものと左右大臣といったようなものを象っている（292－293頁）。

イランの女性は、出産のとき、それぞれの足を、積み重ねた三枚のレンガ（約二六センチ四方で八一九センチの厚みがある）の上にのせ、メッカの方に向けてしゃがみ込む。両足の間に、土を入れた銅製の皿を置く。こうすれば、新生児は、生まれるとすぐ、大地に接触できると信じられている。出産直後、へその緒を切断して、ひもで結ぶ。へその緒を切断しないうちは、産湯を使うことができない。切り取ったへその緒は、土に埋める。このあと、産婆は、新生児の口の中に指を入れて、そっとのどちんこを上げる（H.マセ『ペルシア人の信仰と習俗』パリ、1938年、36頁）。レンガの数は三であるが、左右一対しかない。しかし、出てくる新生児と一体にすれば、三つの土から赤ん坊が生まれるのがわかる。レンガは日干しレンガであるので、赤ん坊が生まれ落ちる土と同じものである。銅皿は祭壇であろう。かつては、初生児、ことに男児は、神の取り分とされた文化があったらしい。

三という数は、誕生だけでなく、とうぜんのことながら、死の場合にも出てくる。韓国では、死体を安置するとき、切った木三個、わらの束三個を三列に並べて置き、その上に七星板という板木をのせ、その上に死体を安置する。死体を伸ばし、両手を合わせる形にし、腰の部分など数か所を板に結び、掛けぶとんを被せて屏風を立てる。七星板の代わりに、竹で簾のようにつくったものや、台所の門や窓門などを使用する。いずれにしても、死体を板にかるく縛っておく（李杜鉉ほか『韓国民俗学概説』崔吉城訳、学生社、1977年、71頁）。イランでは、出産のとき二つ

の三枚重ねのレンガに乗るが、韓国の死体は、三つの木と三つのわらの上に乗る。七星板は、死体を棺に収めるときにも使う板で、棺の底にわらや草を敷き、その上に置く、7つの穴があいた板である。この場合は、死体から体液が漏れることがあると、穴を通して、わらに浸みる。そのほか、戸板が用いられることに注意したい。日本でも、戸外で不慮の死をとげた者は、（自分の家の）戸板（雨戸のこと）に乗せて家に運ばれる。門の戸は、壁の連続と考えられたからであろう。かつては、多くの文化では、死体を壁の中に塗り込めたが、戸板に死体を乗せるのは、その習俗の名残であろう。

韓国では虞祭といって、死者の靈魂を慰安する祭りがあった。虞祭には、葬式当日行い初虞祭と、初虞祭のあとの初の柔日に行う再虞祭と、再虞祭のあとの初の剛日に行う三虞祭がある（李ほか、前掲書、75-76頁）。この祭りは、儒教の祭りであるが、死は三度祭ることによって、やっとその魂が鎮まるとされたのであろう。

日本の葬儀でも、出棺するとき、朝鮮の場合と同じように、三度、棺を上下して家を出ることがある。また、死体の周りを三度、時計の針と逆方向にまわる習俗が一部に残っている。三度やって完了するということに理解されるようになったのであろう。『日本書記』にいう。日本武尊が、伊吹山に登っていくと、山の神は大蛇になって道をふさいだ。尊は蛇を踏み越えて進んだ。そのため、尊は山の神によって毒氣にあてられ、伊勢国の能褒野^{のほの}で病気がひどくなり、そこで亡くなった。天皇は尊を能褒野陵に葬らしめた。尊は白鳥となって倭国に飛んでいった。墓を開いてみると、衣だけが残って死体はなかった。白鳥は倭の琴弾原に留まったので、そこに陵をつくった。白鳥はさらに飛んで、河内の古市邑に留まったので、また、そこに陵をつくった。当時の人は、この三陵を白鳥陵と呼んだ。白鳥は飛んで天に上っていった。陵にはただ、衣冠のみをおさめた（「景行天皇」四〇年は歳条）。日本武尊伝説の中に、道教でいう尸解のモチーフが入っている。尊は、第一回目ですでに尸解して再生するのであるが、白鳥となって倭と河内に飛び、そこにも陵をつくらせている。白鳥は三足のそれではない。三の表象は三陵の中にある。韓国の三虞祭は、葬式の日に最初の虞祭を行い、あとの二つは、定められた日にとり行う。円仁は、開成四年（承和六年、八三九年）二月の日記に、一四・一五・一六日の三が日は寒食の日である。この三日は、天下では煙を出さず、すべて冷えたものを食べる、と記している。開成五年二月二三日の記には、寒食節、三日火を断つ、とある（『入唐求法巡礼行記』1、足立喜六ほか訳注、平凡社、1970年）。寒食節は、冬至から一〇五日目にあたり、二十四節気では四月四日ごろの清明にあたる。清明は、春分から二週間あとの節気で、春分正月のいわば小正月にあたる。清明の日、中国人は墓参をするので、この日が、あるいは年の始まりであったのかも知れない。この日から三日間、今までの火をすべて消し、四日目に火を改めて、次の一年間、使用したのである。寒食節に関しては、『荆楚歳時記』（守屋美都雄訳注、布目潮風ほか補訂、平凡社、1978年）の注にくわしい。この三日間は、火を消して、死の状態になってこもるのであろう。

カーニヴァルは、謝肉祭といわれ、灰の水曜日から始まる四旬節に入る直前の日・月・火曜の三

日間行われる祭りである。四旬節には肉を断つので、うんと肉食をしておこうという、浮かれた祭りと解されている。しかし、南方のラテン系国民とは反対に、北方のケルト、ゲルマン系の国民の間では、同じ三日間をシロヴ・タイドといい、ざんげを行った。ざんげは季節の変わり目、年の変わり目に行うもので、春分直前の冬の祭りの終わりを飾る東大寺の修二会の悔過^{けか}もそうであり、ユダヤ人の教暦一月のニサン月一〇日のヨーム・キップールの前夜は、悔過で過ごす。ニサン月一〇日は、いわば小正月で、これで正月が完了した時代があったのであろう。わが国の十日正月にあたるが、小正月と考えるほかに、一〇日で始まる正月もあったのではないかと考えられる。

四旬節は、日曜を除いた四〇日であるので、最後の復活祭の日曜を入れると四七日になる。この四七日は、仏教の四十九日と同じように、死後のある期間を指していた。イスラム教では、アルバイーンといって、死後四〇日目に死者の追悼をする。シーア派第三代目の教主イマーム・ホセインは、ケルベラの戦いで首を切られたが、アルバイーンの日、その首が胴体にくっつき、イマーム・ホセインは復活したといわれている。イスラム教でも、四〇日は、死後のある期間であったことがわかる。その直前の三日は、寒食節の三日の、火を消す期間に相当し、個人および宇宙の終末を表す。陽気なカーニヴァルは、死の儀礼のもう一面を代表するもので、この面が強調されているのであろう。

いっぽう、イエスは、金曜に処刑され、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、三日三晩、地の中にいた(「マタイ伝」一二・四〇)。その後、日曜によみがえる(「マタイ伝」一六・二一、「マルコ伝」八・三一)。この伝承には、四〇日ないし四七日の中有の観念はない。しかし、よみがえりの前の、死後のこもりは見られる。三日三晩、墓の中に留まるという習俗は、広く見られるようである。北タイのミャオ族の間では、死体が墓の中に沈められると、はじめて靈魂は死人から離れる。靈魂は不死であり、三日三晩はまだ墓のあたりに滞在し、そのあとで死人の家に帰り、新しい子が生まれるまでそこに留まる。その子の身体内に靈魂は入り、死ぬとまた、死体を立ち去る(ベルナツィーク『黄色い葉の精霊』大林太良訳、平凡社、1968年、194頁)。ミャオ族の場合は、三日目に復活するのではなく、家に新しい子が生まれるのを待つ。人が死ぬと、通夜の部屋で、長男夫婦や両親らが性交するのは、ヨーロッパ、日本をはじめ、世界中に広く見られる習俗であるが、子供の死後三日目、両親が儀礼的に性交をして、その子の靈魂を母の胎内に入れる場合がある(J.ヘイスティングズ『宗教・倫理百科事典』9、エディンバラ、1917年、829-830頁)。

古代イランのゾロアスター教徒は、三日間の死者儀礼をしたあと、死体を「沈黙の塔」に運ぶ。『ハーゾークト・ナスク』第二章によると、死者の魂は、第一夜には、彼の頭の近くに座しており、第二夜にも、彼の頭の近くに座しており、第三夜にも、彼の頭の近くに座している(伊藤義教訳『アヴェスター』所収「魂の運命」、辻直四郎編『ヴェーダ・アヴェスター』筑摩書房、1967年)。義者の魂は、それから肉体を離れて、美しい少女の姿をした自分の他我に導かれて極

楽にゆく。ここでも、ゾロアスター教徒の死者は、三日間のこもりをしていることがわかる。

バビロンの王は、新年を迎える直前の三日間、捕虜や奴隷や囚人を仮の王に仕立て、自分自身はどこかに身を隠し、新年の到来と共に仮の王を殺すか追放して、王位を更新した。ローマの王は、この間、儀礼的逃走を行った。フレイザーの『金枝編』(二)(永橋卓介訳、岩波文庫、1951年)の第二五章、「一時的の王」から、二、三の例を引いてみよう。タイでは、第六月(四月の末)の六日に一時的の王が定められ、彼は三日間、主権を享有し、真正の王は宮殿に閉じこもった(260頁)。一時的の王は、毎年任命されるのが習慣であった。しかし、王をある現実の危難から救うために、代理者としての王を立てることもあった。イランのサファヴィー朝の英主アッバース大帝は、1591年、占星術師から危険が迫っていることを警告されたので、王位を退き、ユースフィーというキリスト教徒を三日間王位につけ、統治の終わりに彼を殺して、再び王位についた。アッバースは、占星術師によって、永く光栄ある統治を約束された(268頁)。王位を三日間、仮の王に委せるのは、王の儀礼的、宇宙論的死のためである。この三日間は、王は忌ごもりの状態にあり、それが済めば再生することができた。

イエスの死体を墓に納め、入口に大きい石をころがしておいて人々は帰った。パリサイ人たちは、長官ピラトに向かって、イエスが生前、自分は三日後によみがえる、といったので、三日目まで墓の番をするように命じて下さいといった。ピラトは石に封印し、番人に墓の番をさせた。安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリアたちが墓を見にきた。そのとき、大地震が起こり、主に使いが天から下り、石をわきへ転がして、その上に座った。その衣はまっ白であった。イエスはよみがえり、墓の中には死体はなかった(「マタイ伝」二七・六〇—二八・九)。

N.ネフスキーは、『月と不死』(岡正雄編、加藤九祚解説、平凡社、1971年)でつぎのようにいっている。毎月、月が大空から姿を消して、三日経て再び現れてくる現象は、死者がこの間に復活する思想を、キリストに結びつけるキリスト教の思想を生ぜしめた(7頁)。イエスが三日の金曜に処刑され、三日目の日曜に復活する三日間、月が大空から姿を消すならば、これは毎月のついたちが満月で始まる太陰暦を使った文化の所産であったと考えられる。しかし、全ての民族が太陰暦を使ったわけでないし、ついたちを新月にする民族も多かったので、すべてには妥当しない。

イランの医学では、三日目によみがえらせる伝統もあった。ニザーミーの『四つの講話』の第八話にいう。アディーブ・イスマーイールは哲学者でもあり医師でもあった。あるとき、屠殺市場を通りかかると、屠殺者が羊の皮を剥ぎ、羊の腹に手を入れ、温かい脂肪を取り出して食べていた。イスマーイールは、向かいの八百屋に、この屠殺人が死んだら、自分に知らせるように頼んでおいた。六か月たったある日、男は急死したので、八百屋はイスマーイールに知らせた。彼は死人の足の裏を叩かせ、卒中の治療にとりかかり、三日目によみがえらせた(カイ・カーウース、ニザーミー『ペルシア逸話集』黒柳恒男訳、平凡社、1969年、305頁)。羊の脂肪を多く摂る

と、卒中を起こすと、イランの近代医学ではいうようになったが、ここでは、イスマール・イールの先見を讀める文になっている。足の裏を打つのは、東洋医学では、血流を促進したり、身体に活力を与える行為である。いっぽう、イランでは、この行為は、罪を犯した生徒や犯人を懲戒する行為である。そこには、罰を受ける者のざんげがある。また、死者を打つことによって蘇生させる習俗が広く見られるので、三日間の死のあと、血流を促すために、足の裏を打ったとも考えられる。蘇生した者が屠殺者であったという。これは、羊を殺すことによって、人間がよみがえるという伝承が、物語の中に取り入れられたのであろう。

中国では、生まれて三日目を洗三、死んで三日目を接三という。洗三の日には、子供にお湯をつかわして喜ぶ。この日は子授けの神、^{にゃんにゃん}娘娘を祭る（永尾龍造『支那の民俗』磯部甲陽堂、1927年、36頁以下）。接三の儀式の目的は、それまで、死者の頭のあたりに留まっていた靈魂を、肉体から離すことにある。接三は、四十九日の中有と同じものと考えられていたようである（中川忠英『清俗紀聞』2、孫伯醇・村松一弥編、平凡社、159頁の注）。中国人は、接三を四十九日と忌明けと同じように考えていたので、死後三日目は、他の文化と同じようによみがえりの日であった。したがって、この日の儀式は再生の儀式が中心となる。靈魂を死者の肉体から離脱させ、新しい生体に入れるのが、その目的である。これに対し、洗三は、新生児を生命の水である産湯で洗い、新しい生命をその肉体に付着させる儀式である。接三も洗三も、人間は、死んでも生まれても、三日目に生まれかわることを物語っている。

死者と、死者をよみがえらす生殖の母胎としての女性との関係は、いくつかの文化に見られる。W. レイン『エジプト風俗誌』（大場正史訳、桃源社、1977年）にいう。上エジプトの農民の間では、葬式後の最初の三日間は、毎日、故人の女性の親戚や知人がその家に集まって、哀号したり、奇妙な踊りを踊ったりする。彼女らは、顔や胸や衣服の一部を泥で汚し、腰のまわりに「ハルファ」と呼ぶ草でつくった縄を巻きつける。各自は椰子の枝または長い枝、または槍、抜刀をふりかざしながら、のろのろした動作で、調子もあわずに踊る。三日目に、彼女らは墓に詣でて、その上に綿帯を置き、罪滅ぼしの犠牲として、山羊を一匹屠り、饗宴をひらく（272頁）。著者レインは、注に、ヘロドトス『歴史』二・八五の古代エジプトの婦人が、同じ場合に行った行為をあげている。それによると、エジプトでは人が死ぬと、死人を出した家の女たちは、みな、頭あるいは顔にまで泥を塗り、死体は家に残したまま、肌脱ぎになって、わが胸を打ちながら町中を練り歩く。死者の縁者の女たちも、みな彼女らに同行する。男たちも、肌脱ぎになって胸打ちする。それが済むと、死体をミイラにする場所に運んでゆく（松平千秋訳、岩波文庫）。顔に泥を塗るのは、死あるいは忌ごもりを表すしるしであろう。腰に巻く縄は、忌ごもりの状態にあるときの粗服で、非日常的な死者の世界の姿を表象する。槍や抜刀は、枝と同じような採り物で、死者を再生させるための一種の神楽に用いるのである。のろのろした舞いは、いくつかの文化でも見られるが、死者が徐々に再生してゆく様子を表象する。三日目に、墓に帯を置いて、死の世界からの離脱をはかり、犠牲の山羊に死んでもらって、死者をよみがえらせる。そのための供宴が開か

れ、生者たちと死の世界からよみがえろうとする死者は、共食するのである。哀悼行列で、参列者が胸を打つのは、死者を打つことによって再生させようという呪術を、参列者が代行しているのだと考えられる。かくて、死者は三日目に再生するのである。

現在、ゾロアスター教徒の間で、死穢に接触したために隔離された者が行うバreshnum・ガーには、三を基本とする構造が見られる。それは、ゾロアスター教の神話で、人類の祖であるイマ王（仏教の閻魔王と同根）が建造したワル（ノア方舟も三階になっている）を想起させる。すなわち、三重の溝で囲まれた四角い地面に九つの穴が穿たれ、さらに穴は、三・六・九ずつがそれぞれ三重の溝によって仕切られる。ここで行われる牛の尿による洗浄も、三度なされ、行為の期間も三分され、それぞれが三日間を必要としている。かくして、人は隔離された状態から、再び社会に復帰することができるのである（岡田明憲「アヴェスタの Yima 伝説」『世界口承文芸研究』第5号、大阪外国語大学口承文芸研究会、1984年）。ナクシェ・ロスタムにあるダリウス大王の墓所も、三つの同形の櫃を削り抜いた三つの石室から成る。この墓室内では、三つの櫃で行われる儀礼が、三回行われることによって、大王の再生が完了するとされたのであろう。大王の遺体が、三つの櫃を削り抜いた三つの石室の中で、どのような扱いを受けたかは、今になっては知る由もない。しかし、遺体を櫃から櫃に移すとき、どうしても、遺体を持ち上げて、次の櫃に降ろさなければならない。三を基本とする場合、それぞれの櫃で、遺体を三回上下して、次の櫃に移したのではないかと思う。現代のイスラム化したイランにも、その名残と思われるものが見られる。M. カティーラーイー『レンガからレンガへ（誕生から死まで）』（テヘラン大学、1969年）によると、いちど地上に横たえられた死体を、棺の中に安置するとき、二組の四人の人が、敷き布団の四隅あるいは前後を持ち、三回地上を上げ下げし、棺の近くまで運び、地上に安置した。そして、四度目に棺の中に納め、死体の上に錦かじゅうたんを掛けた（247頁）。墓坑に入れるときは、お祈りのあと、死者の家族の一人が、素手素足のまま、墓坑に入ってゆき、他の人々は、棺から死体を取り出し、三回地上を上げ下げし、四度目に墓坑の中にいる人に死体を渡した。彼は、死者が右脇を下にして、顔をメッカの方角に向けるような姿勢をとるようにして横たえた（253頁）。朝鮮の習俗では、棺が家を出るとき、入口の敷居の上に置いたひょうたんの上に、棺を三回下ろし、ひょうたんを割ってから、出発する。ひょうたんの中には、霊魂が内在し、ひょうたんが破裂することにより、中の霊魂が死体に付着し、死者に活力を与えたと考えられる。日本では、出棺のときや、花嫁の門出のときに、本人が使用してきた茶碗を割る風習があるが、その意味するものも同じである。

このように、死体の処理には、三を基調としたものが広く見られる。日本には、死を四にかけて、四を忌む風があるが、それは本来のものではなかったようである。それでも、四二といった数字の連続は「死に」を連想させるので、大いに忌まれる。いっぽう、三は五や七と共に陽数であるので、忌まれることが少ない。日本でも、死体の扱いには三を基調とするものが多い。井之口章次『日本の葬式』にその例を見てみる。湯濯のために死体を起こすとき、死体に声を掛ける

のが習わしであるが、鹿児島県の宝島では、湯浴みの前には案内と称して、かならず三度声をかける（84頁）。息が切れてから、近親者が水を三べん顔に吹きつけて、「誰それさん、もどるか」という。よびかえすという（34－35頁）。手ふり水を忌む風習は広く見られる。古くは、手水を三度、死者に振りかけたことがあったと思う。水自体は生命の水で、死体に活力を与えるものであった。葬式で泣き女に来てもらうことは多かったが、八重山列島では、死者の床をととのえたのちに、門の人という泣き女が、庭先で大声をはり上げて、三回泣きだす。すると家族も親類も大声で泣きだすという（113頁）。

死者に三回声を掛けたり、三回泣くことにより、死者に活力を与えたのであろう。これに対して、朝鮮では、葬式のあと、死者に対して三日三晩、どら、太鼓、壺、かんを叩いて、悪霊を死体にとり憑かないように追い出した。大気は疱瘡、チフス、コレラの悪魔によって汚染されているので、これらの悪魔が死体の中に入り、死体をよみがえらせて、生者を殺さないようにという願いで大音を立てるのだという（ヘイスティングズ『宗教・倫理百科事典』1、1908年、255頁）。朝鮮では、葬式後三日のちに、死者がよみがえる伝承があったらしい。上例では、それが悪魔によって利用されることになっている。恐らく、死者の魂は、この三日間、他の文化と同じように、死者の枕辺を離れないでさまよっていたであろう。三日三晩立てる轟音は、人々が信じているような悪魔除けではなく、本来は、死者を覚醒させるためのものであったかも知れない。生と死の境界には、多くの文化で、音が存在する。これらの音は、かならずしも魔除けではない。臨終の人が発する大音声や、出産のあと新生児が上げる産声は、死と生の境界を象徴する音である。

人は死ぬと、七日目に三途の川を渡ってあの世に行くといわれる。三途の川は三瀬川ともいわれるように、三つの瀬から成り、それぞれの瀬に渡し場がある。人は生前の業によって、いずれかの瀬を渡らなければならない。死者の頭陀袋には、渡し守りに払うビタ銭を入れる。三途の川の俗信は、中国の宋時代あるいは日本の平安時代の偽経とされる『地藏菩薩発心因縁十王経』にある説である。似たような話しはギリシア神話にもあるから、『十王経』の説は、まったくのこちらでの作り話でもなさそうである。ギリシアには、ステュクス川のほかに、アケロンとその支流コキュトス川の三つが、いわゆる三途の川と考えられた。渡し守りカロンには、オボロス貨を渡して、川を渡してもらった。東洋の三途の川は、死者は三日目でなく七日目に渡るので、仏教とは関係のない習俗ではあるが、七七日の第一週の行事ということになる。日本とギリシアの三途の川は、三つの川を一つずつ渡って冥土に至るというわけではない。しかし、死とあの世の間に、三つの川が存在することは、死後の再生直前の三つのものの出現を意味する。

三つのものを経て死者がよみがえったり、死の世界から新生児が生まれ出たりするのは、陰と陽二つの存在を経て、三番目に中性の存在を経ることによる結果であると、多くの人々は考えたようである。この構図がいちばん安定性があると人々は考えたであろう。三回目で打ち止めになり、四回目はだれも期待しない。

（1992. 5. 12 受理）